

大豆「里のほほえみ」の良質安定栽培の実証

要約

土壌分析に基づいた土づくり肥料の施用を行った結果、「苦土タンカル+畑のカルシウム」施用区において、対照区（苦土タンカル）よりも増収となった。しかし、増収効果を支出（肥料費）が上回り、収益は対照区より減少した。また、OM37 施用区では、収量・収益ともに対照区より減少した。

○ 展示のねらい

大豆栽培において単収や百粒重の低下、しわ粒による品質低下などは生産者の生産意欲減退の主要因となっている。収量・品質低下の要因として作付回数の増加に伴い、土壌中のミネラル分が不足していることが思慮されることから、土壌分析に基づき交換性塩基質肥料等を増強することで、地力を改良し、収量・品質の改善効果を実証する。

区	土づくり肥料 (10a当たり)	基肥施用量 (10a当たり)	備考
供試区 1	苦土タンカル(慣行) 100kg + 畑のカルシウム 80kg	JAなすの豆専用 500 〔5-20-20〕 40kg	全区同一ほ場内
供試区 2	OM37 140kg		
対照区(慣行)	苦土タンカル 100kg		

○ 主な成果

区	収量 (kg/10a)		百粒重 (g)	大粒率 (%)	子実粒数 (粒/株)	区	収入 ※1	支出 ※2	収益 (収入-支出)	
	対照区比	対照区との差								
供試区 1	347.8	101.6	38.4	96.0	95.6	供試区 1	142,499	54,856	87,643	-3,706
供試区 2	323.8	94.6	37.9	92.8	88.1	供試区 2	135,081	56,720	78,361	-12,988
対照区	342.5	100	37.6	93.0	94.0	対照区	140,861	49,512	91,349	-

注1) 収量は、小粒(5.5mm)以上で算出(坪刈り調査)。

2) 百粒重は、大粒(7.9mm以上)で算出。

※1) 大豆販売額と「水田活用の直接支払交付金」と「畑作物の直接支払交付金」の合計。

※2) 肥料費とその他経費の合計。

収量は対照区に比べ、供試区1では2%増加し、供試区2では5%減少した。

収益は対照区に比べ、供試区1では収量が高かったことから収入は上回ったが、支出（肥料費）が増収効果を上回り、3,706円少なくなった。供試区2では、対照区に比べて収量が低かったことから収入が少なく、かつ、支出（肥料費）が多かったため、12,988円少なくなった。

今回の供試ほ場は連作2年目で、地力が維持されていた。また、土壌中のミネラル分も高めであったことから、土づくり肥料施用効果が現れにくい状況であった。

○ 今後の方向性

増収効果が期待される「畑のカルシウム」に注目し、地力低下やミネラル不足により収量が伸び悩んでいるほ場で収量向上に向けた確認を行う。

実施機関： 那須農業振興事務所経営普及部 実施場所： 大田原市

問合せ先： 栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315